

令和5年度 三鷹の森学園 三鷹市立第三中学校 学園・学校評価報告書

このことについて、下記のとおり報告いたします。

記

学園評価 ※学園内で統一記述			学校評価 ※学校ごとに記述									
取組項目	今年度の重点目標	成果	課題と改善方針	学校の教育目標 (中期目標)	今年度の重点目標 (本年度目標)	今年度の重点目標を達成するための具体的な取組	第1回評価 取組 成果	第2回評価 取組 成果	自己評価(第2回)	学校関係者評価(第2回)		
	今年度明らかになった課題のうち、次に次年度の重点とすること		来年度の重点課題を解決するための改善方針		今年度明らかになった課題 ※「第2回学校関係者評価」を経て記述				来年度の改善方針 ※「第2回学校関係者評価」を経て記述			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「豊かな心」については、CS委員からも高い期待が寄せられており、重点に位置付けている。</li> <li>●学園研究については、3校の共通理解に立った研究の流れを生かし、児童・生徒の資質・能力の向上に結び付く効果的な研究をさらに進めていく。</li> <li>●学園・学校評価については、実際の学校教育の質的向上にさらにつながっていくよう、評価項目や運用方法を工夫し、評価のための評価ではなく、よりよい学園・学校づくりに具体的に活かしていく。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「豊かな心」の育成を教育課程編成上の重点に位置付け、児童・生徒の交流活動や各校の特別活動等の充実の中で育成する。</li> <li>●学習指導要領のより深い実践と検証を進めていく時期であることから、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善を一層進める。</li> <li>●CS委員をはじめとした地域や保護者の皆様は、学校をさらに良く見ていただくよう、評価項目や運用方法を工夫し、評価のための評価ではなく、よりよい学園・学校づくりに具体的に活かしていく。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「豊かな心」については、CS委員からも高い期待が寄せられており、引き続き学校の氏名として取り組むことが期待されている。</li> <li>●学園研究については、3校の共通理解に立った研究の流れを生かし、児童・生徒の資質・能力の向上に結び付く効果的な研究をさらに進めていく。</li> <li>●CS委員をはじめとした地域や保護者の皆様は、学校をさらに良く見ていただくよう、評価項目や運用方法を工夫し、評価のための評価ではなく、よりよい学園・学校づくりに具体的に活かしていく。</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>●「豊かな心」の育成を教育課程編成上の重点に位置付けるとともに、学校経営方針にも明示し、各教科・領域を通じて組織的に取り組む、情報発信する。</li> <li>●学習指導要領のより深い実践と検証を進めていく時期であることから、学園研究の主題と校内の授業づくりのテーマを「主体的・対話的で深い学び」と位置付け、生徒の資質・能力を高めるための授業改善を一層進める。</li> <li>●CS委員をはじめとした地域や保護者の皆様は、学校をさらに良く見ていただくよう、評価項目や運用方法を工夫し、評価のための評価ではなく、よりよい学園・学校づくりに具体的に活かしていく。</li> </ul>		
コミュニティ・スクールの運営	スクール・コミュニティの創造に向けて、地域・学校協働活動の充実を図る。	○3校共通で取り組んだ「地域未来塾」について、地域人材の活用状況に着目し、地域・学校の協働活動の指標とした。人材活用については、今年度は年度途中で3校共にボランティアの増員が実現し、体制の拡充が図れた。 ○参加児童・生徒からも、地域未来塾に参加したことが自分にとってプラスになっているとの肯定的な回答が得られていることから、一定の効果が認められる。また、年度中に、第2回目の募集を行ったところ、2校で参加児童・生徒の増加があり、活動の充実につながったと考えられる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●活動の適正化とそのための人材確保。活動の内容が児童・生徒の豊かな心への育成にとって適正であるかの確認と、活動のための人材をどう確保するか。</li> <li>●異なる人材の充実。1年間の長いスパンの中でだけでなく、活動をしながら短いスパンでの改善も行っていきながら、活動を充実する取り組みが重要。</li> <li>●担当やボランティア任せにするのではなく、基本方針や運営方針を共通理解し、定期的に課題を共有しながら進める。</li> <li>●今年、試行的に行った第2回募集が効果的であったことから、活動について、継続的にPRしたり、年度途中の募集を行ったりし、活動の深化を図りつつ、さらなる参加の拡大を図る。</li> </ul>	学園目標の実現に向けた取り組みの一つとして「未来塾」を位置付け、その取り組みの充実を図る。	「自ら学ぶ力」「ねばり強く取り組む力」の育成のために大学生の指導員等による「三鷹三中未来塾」をSC推進員との協働により6月中にスタートし、個別最適化された学びの場の一つとして活用する。	「未来塾」を学習支援の場としても活用するために、定期募集だけでなく、教育相談や面談等を通じて入塾できる仕組みをさらに整備する。	101	115	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地域未来塾に関しては、6月に予定通り事業を開始した後、今年度は初めて年度途中での再募集を10月に行い、7人追加し合計3人での実施をすることができた。</li> <li>●当初ボランティア2人で開始し、CS委員ほかの協力の下、大学生3人を追加し、支援体制の充実を図った。</li> <li>●7月分アンケートでは、参加生徒全員が肯定的な回答であった(100%)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(18)</li> <li>●市の新システムに関する生徒への手立てとしては効果があることがわかった。</li> <li>●学力向上の生徒にも力を伸ばせる取り組みも今後、考えていきたい。</li> <li>●「自学自習」の方針になっていく中で「自学自習」ができない生徒も参加しているように、そういった子どもを支援していくには来年度の課題のひとつと考えているところである。</li> <li>●来年度以降コミュニティ・スクールの運営は未来塾以外の指標も入れていきたい。</li> <li>●三鷹未来塾の運営は、自律学習・忍耐力の育成に対する明確な目標を持ち、その実現に向けた具体的な取り組みを行っている。大学生の指導員とSC推進員との協働によるこのプログラムは、児童にとって個別最適化された学びの場を提供しており、教育相談や面談を通じた入塾の仕組みの整備は、さらなる児童の成長を促している。特に、年度途中で追加募集を行い、支援体制を充実させた点は、プログラムの柔軟性と対応力を示している。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	地域の教育資源を活用したカリキュラム・マネジメントを推進する。	○「『主体的に学習に取り組む態度』の指導と評価の在り方」『カリキュラム・マネジメント・ガイド』を活用した授業実践の研究テーマの下、授業研究に取り組んだ。「教科・領域間のつながり」、「小・中学校のつながり」、「地域とのつながり」の3つの観点に沿った研究授業を6つ行った。協議も活発に行われ、学んだことをそれぞれが活かすことができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全教育活動を通じて、よりカリキュラム・マネジメントを意識していくこと。</li> <li>○地域の教育資源を更に活用していく。</li> </ul>	「カリキュラム・マネジメント・ガイド」に基づき、小・中学校間でのつながりを意識し、地域の教育資源を活用した教科等横断的な指導の実践化に取り組む。	「地域」の活用を「カリキュラム・マネジメント」に基づき、小・中学校間でのつながりを意識し、地域の教育資源を活用した教科等横断的な指導の実践化に取り組む。	●研究部が中心となって1学期中に授業者を決定し、2学期に校内での共同授業検討を行ったうえで研究授業を実施して共有する。	103	117	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学園研究においては、第1回で学園の過去の研究成果である「カリキュラム・マネジメント・ガイド」を活用した研修を行うとともに、研究の目的を共通理解し、効果的な授業研究を行うことができた。</li> <li>●3回の授業研究では、3校の教員が集まり、児童・生徒の学習状況を踏まえての課題や取り組みについて、有意義な協議ができた。</li> <li>●3校の研究部の教員が、市の新システムを活用し、連絡を密に取って連絡・調整を十分に行えたため、小中のつながりや地域とのつながりを生かした授業実践を共有し深めることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●市の新システムには関心がある。連絡・調整が十分行えることは評価できる。</li> <li>●学校の(地域に対する)ニーズをお聞きして、動いていければと思います。年度始め等に各学年？または各教科？のニーズをお聞きできる機会があるといいなと思います。</li> <li>●カリキュラム・マネジメントの活用を促していただければと思います。</li> <li>●地域の教育資源の活用と教科横断的な授業作りを目標として、小・中一貫教育の特性を活かした実践的研究に成功している。特に、研究部を中心に行った授業者の選定と実践の検証は、教育の質の向上に大きく寄与している。3校の教員が参加した授業研究協議会は、教育実践の共有と改善に重要な役割を果たしている。教員間の協働が80%以上であることから、教育活動の成功を示しており、今後もこのような協働に基づいた教育研究を継続し、小・中一貫教育のさらなる深化を目指すことが重要である。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	個別最適化学びと協働的な学びの実現に向けた取り組みを推進する。	○「『主体的に取り組む態度』の指導と評価の在り方」をテーマに、学園内で研究授業などを通して授業改善の視点に立った取り組みを進めることができた。 ○学習活動におけるタブレットの活用を、さらに充実させることができた。8月からの新システムへの移行に伴いタブレット活用の幅が広がったことも効果的になっている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業研究については、今年度の成果を学園全体で共有・確認し次年度にさらに発展させていく。</li> <li>●タブレットの活用については、使い方に課題が見られる児童・生徒もいるため、活用の指導の充実を図る。</li> </ul>	タブレットやネットワーク環境の活用を通して個別最適化された学びと協働的な学びの実現に向けて取り組む。	「情報部」を設置して、タブレットを「学習ツール」「コミュニケーションツール」として授業のねらいに沿って活用するための調査・研究を行い、全校で共有する。	●7月までに情報部から、GIGAスクール等についての職員への発信を行うとともに、学習用タブレットの適正な運用や、学校ホームページにより情報発信の実現を通じ、全教員で個別最適化の視点からの授業改善に取り組む。	105	119	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月に新設した情報部を中心に、情報教育や機器を活用した教育活動が組織的に推進された。次年度向けに、校務分掌組織の中で、今後さらに有効に機能する位置付けについて改善を図りたい。</li> <li>●学習活動におけるタブレットの活用が充実した半面、使い方に課題が見られる生徒もいるため、活用の指導の充実を図っていく。</li> <li>●8月からの新システムへの移行については、わかりづらさや不便さが見られたものの、情報部を中心に課題解決を図り、3学期現在は混乱なく移行することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(18)</li> <li>●ゼロ一度、情報部の取り組みを共有する機会を設定していただきたい。</li> <li>●タブレットの活用は光と陰があり、使い方に課題が見られる生徒への対応は気になるところである。</li> <li>●不適切な利用も少くなく、学習用タブレットとして制限が大きすぎるところもあると思います。詳細なコントロールを希望します。</li> <li>●情報部による取り組みは、タブレットを学習ツールおよびコミュニケーションツールとして効果的に活用し、教育の質の向上に寄与している。情報部が主導するGIGAスクール関連の発信や、学習用タブレットの適正な運用に関する研究は、教員間の情報共有と教育活動の改善に貴重な基礎を提供している。また、生徒のタブレット使用における課題の存在と新システムへの移行に伴う初期の混乱は、今後の改善点として注目される。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	あらゆる教育活動を通して、他者との関わりを大切に、協働して課題解決に取り組もうとする意欲を育む。	○中学校では、児童会・生徒会交流会、懇話会において、個人、グループ、全体での意見交換を通じ生徒が主体的に関わるデジタル・シニアシニア教育の充実を図った。さらに、プレ中学生体験や部活動体験を通じ、小中学生の交流を深めることができた。地域の行事に昨年度以上にボランティアとして参加することができた。 ○小学校では、プレ中体験、部活動体験、小・小交流を通じた。プレ中体験や部活動体験では、中学校の授業を受けたり、中学生から学校の説明を聞いたりすることができた。小・小交流では自分たちが考えた、小・小交流の取り組みを共有し、中学校教員の専門性を生かした指導により、技能の習得と学習意欲の向上が促進され、体力・運動能力の向上を図ることができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●年間指導計画に基き、多様な教科において、乗り入れ教員、地域人材等、教育活動のさらなる充実を図る。</li> <li>●SC推進員との連携を図る。</li> <li>●学園内の情報共有、CS委員会との連携をより一層図る。</li> </ul>	生徒が互いを尊重し合う温かい集団を形成し、三鷹の森学園への帰属意識を高めるとともに、地域や学園の活動を通して自己有用感を育むことで、地域の一員としての自覚を培う。	地域における貢献活動や小学校との交流活動など、コロナ禍においても実施可能な方法を検討し、生徒の活動の機会を作る。いじめのない学校づくりのために、「いじめ見逃しゼロ」を合言葉に、いじめに対する意識を高め、未然防止や早期発見に重点を置いた取り組みを行う。	●児童・生徒会交流会、プレ中学生体験、部活動体験等、基本的な感染防止対策を講じつつ、効果的に実施する。	107	121	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●7月に児童会・生徒会交流会、8月にプレ中学生体験、12月にデジタルシニアシニア教育を実施し、小中学生の交流を深める音が出た。</li> <li>●11月に行われた総合防災訓練をはじめとした地域行事等に、昨年度を上回る多数の三中学生がボランティアとして参加する頃ができた。</li> <li>●いじめについては、いじめ疑いの時点で校内委員会を招集し、組織的に事実確認や指導についての共通理解、指導経過と解消の有無などの確認を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(17) 不適切(1)</li> <li>●肯定的評価が80%を超えていることは評価できる。いじめ対応も早めに行われていることは評価できる。</li> <li>●地域のボランティアの関心が増える良いことだと思います。学校の負担が少ないうえボランティアの参加も増えています。自己肯定感を定定期観測するなどして良好な確認いただければと思います。</li> <li>●地域貢献活動や小学校との交流活動を通じて、生徒の社会参加の機会を増やし、彼らの人間性の発展に寄与している。コロナ禍においても感染防止対策を講じながら、児童・生徒会交流会やプレ中学生体験などの実施は、生徒間の相互理解と協力を促進し、コミュニティへの積極的な参加を奨励している。また、「いじめ見逃しゼロ」の取り組みは、いじめの未然防止と早期発見に効果的であり、安全で支援的な学校環境を構築している。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	自らの健康・体力の保持・増進に努め、望ましい生活習慣を身に付けた児童・生徒を育成する。	○中学校から小学校への乗り入れ授業では、中学校教員の専門性を生かした指導により、技能の習得と学習意欲の向上が促進され、体力・運動能力の向上を図ることができた。 ○体育の授業だけでなく、休み時間等も活用した縄跳びや持久走、体力づくり等、運動に親しむ活動を実施し、体力・運動能力の向上を図ることができた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>①新体力テストの結果から、多くの学年において全国の平均値は下回っている。</li> <li>②就寝時間が遅いなど、生活リズムが乱れ、規則正しい生活習慣の定着ができていない児童・生徒が見られる。</li> </ul>	自らの体力や健康への関心を高めるとともに、自ら目標をもって自分の体力や運動能力の向上に取り組めるようにする。	継続的な体力づくりの取組と、生徒自身が目標をもって自分の体力や運動能力の向上に取り組めるようにする。	○1学期に実施する「体力・運動能力調査」の結果を踏まえ、総合的な体力向上策として、保健体育の授業にコーディネーション・トレーニングを取り入れるなどに取り組む。1学期に実施する「体力・運動能力調査」の結果を踏まえ、総合的な体力向上策として、保健体育の授業にコーディネーション・トレーニングを取り入れるなどに取り組む。	109	123	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1学期に全学年で体力調査を実施した。</li> <li>●昨年度の結果調査の結果を踏まえ、総合的な体力向上策として、保健体育の授業にコーディネーション・トレーニングを取り入れるなどに取り組む。</li> <li>●1月に昼休みに体力づくりを実施し、多くの生徒の傘の下、健康・体力の向上に関する実践と啓発を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(18)</li> <li>●生徒が自身の課題や目標を意識しながら個に応じた取り組みをしていることは評価できる。昼休みの体力づくりの取組も評価できる。</li> <li>●結果に結びつくとお祈りします。</li> <li>●体力づくりの取り組みは、継続的かつ効果的な方法を通じて生徒の体力と運動能力の向上に貢献している。1学期に実施された全学年の体力調査は、生徒に自身の体力レベルを認識させ、個々の課題と目標設定に繋がっている。特に、昼休みの体力づくりの実施は、生徒が積極的に参加し、自分の健康と体力向上に向けて自主的に取り組む環境を提供している。保健体育の授業にコーディネーション・トレーニングを取り入れるなどの工夫は、体力向上のための多様なアプローチを提供しており、これらの取り組みが生徒の健康と体力向上に実際に貢献していることが明らかである。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	地域人材の活躍、学校周辺環境を活用した人間力・社会力の育成	○学校ホームページや学校だよりを活用し、教育活動の情報を適切に発信することができた。 ○SC推進員及びCS委員会地域サポート部との連携により、地域の教育資源を活用した授業や学園サポートチームを活かした授業を行うことができた。地域とのつながりを活用することで、「知的資源」としての広がりがもたらされた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●校支援助での配信等も行っているが、校支援助の保護者の開封率が上がらない。</li> <li>●地域人材を授業に取り入れることは、学年により差が出る可能性がある。</li> </ul>	進路指導において、真の自立を目指して、自分を理解し、自分で考えきめたことについて最後までやり抜く態度を育む。	実施方法や実施規模を見直すことで感染対策と進路関係事業の取組を両立させ、3年間の進路学習が継続的・段階的に展開できるようにする。	○「職場訪問」「進路説明会」など、アフターコロナの状況下における適切な方法で企画実施していく。	111	125	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●6月と10月に、進路説明会を対面を実施するとともに、進路だよりをホームページに掲載し、進路情報の普及を図った。</li> <li>●3年振りとなる第2学年の職場体験について、地域・保護者の協力もいただきながら、第2学年207人の生徒に対し、84ヶ所の職場を確保し、実施することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(18)</li> <li>●3年間を見通した進路の取り組みは評価できる。小中一貫教育校の利点を活かして3年間を見通した進路の取り組みに広げたい。</li> <li>●職場体験の事業所探しはもとより頑張るよう努力します。</li> <li>●職場体験の成功のきっかけとして、反響が大きいと感じています。</li> <li>●進路教育活動は、アフターコロナの状況を踏まえた柔軟な実施方法の採用により、生徒の進路学習を継続的かつ段階的に展開している。特に、対面での進路説明会の実施や、進路情報をホームページに掲載する取り組みは、生徒と保護者にとって有益な進路情報の提供手段となっている。さらに、地域と保護者の協力を得ながら第2学年の職場体験を再開し、多くの生徒に実践的な職業体験の機会を提供したことは、特に注目される。</li> </ul>
と小・での中・教員等が主体的に活動	教職員の働き方改革と学園の教育活動の充実・向上の両立を図る。	○校務支援員やスクールサポートスタッフなどの人的配置を活用するなどして、校務処理の効率化を図ることができ、業務の軽減が毎年進捗している状況であり、オンラインによる会議も常態化しており、負担軽減につながっている。 ○働き方改革に対する教職員の意識も年々向上し、退勤時刻の早期化や残業時間の減少などにも見られている。余裕ができた時間を授業準備や児童・生徒の対応に割くことが可能となっている。 ○昨年度に引き続き、校務分掌の見直しや業務改善を行うことで、業務量は減少傾向にある。学校全体で、働き方改革を進め	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 来年度から新たに配置される校務支援員などの人的資源をより効果的に活用して、更なる効率化を図ることが課題である。</li> <li>② 教職員の中には、働き方改革の意義を理解しているものの、行動が伴わず、依然として退勤時刻を大幅に過ぎても仕事に従事し、結果、残業時間が増やしてしまっている例も見られることが課題である。</li> <li>③ 教員の勤務体系(勤務時間や休業日の扱いなど)や学校が本来行うべき業務については、保護者や地域に周知が不十分で、一方で負担感依然として増え、業務の軽減が一層進むように、意図的・計画的に進めていく必要がある。</li> <li>④ このような一部の教員に対して、個別に相談し、指導するなどして、改革に対する指導を醸成していく必要がある。</li> <li>⑤ このようなケースには、毅然とした態度で対応し、するべきことはしっかり行い、できないこと、業務範囲外のことははっきり断る姿勢を見せなくてはいけない。</li> </ul>	業務内容や実施方法の見直し、スタッフも含めた業務分担の検討を進め、教員の時間外勤務の削減を目指す。	●業務改善の目標や、年休の取得計画の設定など、具体的な取組を促進するために、学期ごとに、全ての教員と、業務改善の面談を実施する。	○業務改善の目標や、年休の取得計画の設定など、具体的な取組を促進するために、学期ごとに、全ての教員と、業務改善の面談を実施する。	113	127	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●職員面談を年間3回実施し、在校時間や効果的な業務の遂行についての支援を行った。「定時退勤日」や「閉庁日」の設定により、職員が帰りの時間や環境の確保が図られた。</li> <li>●教員の時間外勤務については毎月末に確認し、4月から月を追って平均在校時間は、ほぼ減少傾向にあり、月ごとの在校時間が突出している職員には声掛けを行い、業務の相談を行うなどし、長時間勤務が常態化しないよう努めた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●適正かつ妥当(18)</li> <li>●教員の時間外勤務に部活動指導も含めて調査すると良い。教員の多忙感を減らす取組も改めて見直し考えたい。</li> <li>●業務削減が自己目的化しないよう留意ください。</li> <li>●働き方改革は、実効性のある業務改善取組を年間を通じて展開し、教員の労働環境改善に大きく貢献している。特に、「定時退勤日」の新設や「閉庁日」の設定は、教員が帰りが楽になり、ワークライフバランスの向上に効果的である。年間3回の職員面談による個別の支援は、教員の在校時間や効果的な業務遂行についての改善を促している。また、月ごとの在校時間の確認と、長時間勤務の削減による相談は、業務の過重を防ぎ、教員の負担軽減に寄与している。これらの取り組みにより、教員の月時間外勤務45時間以下が70%以上に達するなど、具体的な成果が見られている。</li> </ul>